

シニアの韓国見聞録 4 日間

仏教伝来の地を訪ねて

仏教東漸の最後の経路に当たる韓国に念願かなって足を踏み入れた。定年 2 年目にスペインの大学に留学し、その後 10 年にわたり文学紀行で名作の舞台を訪ねてきた。

「ドン・キホーテ」から始まり「ハムレット」「レ・ミゼラブル」「戦争と平和」「風と共に去りぬ」「赤毛のアン」など 15 作品あまり……。

取り組んでみたい作品がほぼ終わった段階で、文学ではないが人間の生き方を説いた「法華経」の舞台を、ということと 2 年前にインドを訪ねた。釈尊が成道し布教に歩いた地を訪ねることはできなかったが、インドから東に向かい日本に渡った仏教が今度はインドに帰るという日蓮大聖人の予言（御書 2 編：最後尾にあります）通りに、法華経を基にしたインド創価学会メンバーの躍動する姿を目の当たりにした。仏法西還の意義をとどめたデリー郊外の創価菩提樹園も訪ねることもできた。

歴史の教科書によれば、釈尊の仏教は、インドからシルクロードを経て中国に渡り、さらに朝鮮半島を経て日本に伝わった。中国はあまりにも広大でシルクロードや仏跡を訪ねる機会はなかったが、昨年、北京を訪れ“ともかく仏教伝来の大地を踏んだ”と自分で勝手にその意義を留めた。

そして今回——朝鮮半島南部の韓国で、かつて仏教文化が栄えた百済、新羅を訪ねることができたのは、これまた自分に勝手な満足感を与えるものとなったのだ。

発端は 10 月に JTB が企画した韓国ツアー。11 月 26 日から 3 泊 4 日で、1 日目がソウル市内の観光、2 日目が百済。3 日目はフリーだという。しかも格安の参加費。かつての職場の友人に声をかけると、彼の意欲的な提案で K T X（新幹線型の特急）で釜山に行き、その足で東の慶州を訪ねようということになったのだ。

以下は思い出すままに綴った記録です。隣国の韓国は訪れた日本人や専門家も多く、はるかに実態に深く豊富な情報を持っている方もいるかもしれません。これはたった 3 泊 4 日の短い期間に初訪問の日本人仏教徒（創価学会員）の目に映った“新鮮な見聞録”としてご覧いただければ幸いです。

ソウル

☆ 「ソウル」は固有の韓国語で「みやこ」の意味だという。1394 年から漢陽、漢城、京城、ソウルと名前を変えつつも 600 年あまり国の中心となってきた。現在の人口は約 1000 万人。周辺の市を合わせた首都圏で考えると韓国全体の約 4 分の 1 あまりの人口がソウルに集中していることになる。

地下鉄に乗る



インド菩提樹園と万里の長城



ソウルの観光ボランティア

◇ なにせ韓国語の全くわからない70代の二人旅。ソウルの地下鉄網は東京と同じように複雑に張り巡らされていて、韓国語のわからない初訪問者にはけっこう難しい。それが救われるのが路線ごとの車両がそれぞれカラー化されていて<地図も>路線と駅に番号が付けられているこ

とだ。3桁の数字の最初の数字が路線の番号、あとの2桁が駅の番号であり順番になっている。

したがって路線名や駅名が読めなくてもなんとか目的地まで着くことができた。近年、都内の地下鉄でも英語で放送される番号を聞くことが多く、その意味がよくわからなかったが、自分が“外国人”となってみてその便利さを納得できた。

- ◇ 乗車はプリペイドカードが主流で機械による改札もほぼ都内と同じ。ただ乗り換えの際に歩く構内の連絡通路の長いのには驚いた。乗換駅や乗り換え路線にもよるだろうが、500mあまりを歩くのは度々だった。車内の横幅は都内の車両よりやや広い感じ。一部の車両の椅子席は金属だけになっていた。当然ながら硬く少々冷たかった。これは、かつての地下鉄火災の教訓からか？ 車内でスマホを覗きいじる光景は都内の地下鉄やJRの車内と全く同じ。今は世界中の地下鉄や電車がこんな様相を呈しているのだろうか？

百済

- ◇ 日本の古代仏教は朝鮮半島および中国大陸から伝来した。仏教学者・鎌田茂雄氏によれば、日本に最初に伝来したのは百済仏教であり、ついで高句麗より伝わった。推古朝の末期から新羅仏教が入り、さらに遣隋学問僧の帰朝とともに大陸仏教が流入した。このように百済、高句麗、新羅、大陸仏教の順序に、あるいは互いに重層的に複合して伝来したのが仏教の日本伝播であった、としている。
- ◇ 日本と関わりが深かった百済。百済の僧の渡来があり、日本の尼僧が百済に留学した。最後の都として知られているのが扶余である。現在の人口は約7万人。ここで仏教文化が花開いたが、やがて唐と結んだ隣国の新羅に責め滅ばされてしまった。扶余の観光には想像力が必要だ、と言われる。現在残っているのは、寺院や城の跡、戦跡という具合にすべて「跡」だからだ。
- ◇ 我々が訪れた「世界遺産百済歴史遺跡地区」となっている定林寺址には焼け残った高さ8.8mの5層の石塔1基と高麗時代の石仏が1体のみだった。発掘調査によれば、創建当初は中門、塔、金堂や講堂、回廊といった建物が一直線に並ぶ壮大な伽藍だったようだ。近くには国立扶余博物館もあり、さらに少し離れた地には百済の都を再現した大型テーマパーク、百済文化団地がある。



焼け残った石塔と後方の石仏が入った建物

- ◇ 百済から日本に仏教が伝わったのは 538 年だった。日本では 7 世紀の前半、飛鳥時代に寺が建ち始めた。ヤマト政権は百済と友好関係を結び軍事援助も続けていた。

慶州



- ◇ 新羅も古代日本と深い（写真左上：仏国寺の門 右：別の門に置かれた仁王像）つながりのあった国だ。古都慶州は新羅の政治、文化の中心となっていた。町全体が文化財を有する遺跡地。近年、仏国寺と石窟庵はユネスコの世界遺産として登録されている。
- ◇ 仏国寺の創建は新羅時代。仏国寺から 1.5 km ほど山道を上ったところに、花崗岩を組



んで築いたドームに土をかぶせた人工の石窟がある。中の丸い部屋に安置されているのは釈迦如来坐像で優しさと芸術的な美しさがあった。やはり仏像は仏教美術の中核とも言えるだろう。保護のため厚いガラスで仕切られており、写真撮影も禁止されていたのは残念だった。

（石窟庵の外観。釈迦如来坐像が置かれている）

釜山

行程的には新幹線 KTX でソウル—釜山—新慶州—ソウルでしたが、仏教伝来の記事の視点からこの稿を最後に持ってきました。

- ◇ 釜山は韓国最大の港湾都市で、名前は山の形が鉄釜に似ていることに由来するという。フェリーが日本の下関とを結んでいて、博多や大阪などからの旅客船が多く到着している。中世以来、釜山港は日本との交易拠点として賑わうようになった。アメリカに長く住む友人がよくカラオケで演歌「釜山港へ帰れ」を歌っていた情景も浮かんでくる。
- ◇ まず釜山の全体が見渡せる釜山タワーに登ってみた。展望台の高さは 118 尺。南にはフェリーや船を浮かべた港湾が、真下には緑色の屋根をした商店街、後方の山の近くには高層の住宅団



（写真は英雄・李舜臣像と釜山タワー：李舜臣は、壬申倭乱<秀吉の朝鮮侵略>の際、亀甲船という水軍を率いて日本軍を撃滅した韓国の英雄）

地が広がっていた。展望台の窓の上方には方角に合わせて、東京、ワシントン、メキシコ、ボリビア・・・といったように書かれていて、その方角に都市があることを示していて、ちょっと心広がっていくような感覚にもなった。

☆ 釜山では韓国SGI（創価学会インタナショナル）の水晶文化会館を訪問した。会館の事務長は我々を歓待し建物の内部も案内してくれた。まだ新しい4階建ての建物は外も中も美しく磨き抜かれているようだった。4階には防音装置がついた鼓笛隊専用の練習場もあり、講堂、学習室など、各階の設備も日本の会館以上に整っているようにも思えた。

☆ 「ちょうど今日、ここから東京の創価学会総本部の大誓堂の勤行会に1グループが出発しました。明日はもう1グループが出て行く予定です」と事務長。その言葉を聞きながら、素晴らしい勢いで伸展している韓国SGIの歴史に思いをはせた。



☆ かつて韓国SGIには厳しい

タワーの展望台から釜山港を望む

冬の日があった。東に向いて初座の勤行なんてとんでもない。日本を拝んでいることになるじゃないか！」ととがめられ、座談会もおおやけには開けなかった。それが全国での清掃運動や地域や社会に貢献しようとするメンバーの姿勢などもあって徐々に変わっていった。さらに「大恩のある韓国・・・」というSGI会長でもある池田先生の度重なる発言が状況を変えていったとも言えよう。そして今、SGIでは最も多い数のメンバーが母国の繁栄と平和に貢献している。

☆ 韓国では統計的にはキリスト教徒が約55%、仏教徒が43%だという。この仏教徒の大部分は古来からの伝統仏教だと思われるが、日韓の複雑な歴史の中で、新しい生命を吹き込まれた仏教が韓国に戻り、また日韓の市民の交流が両国の友好に力強い貢献をしている。ここにも仏教西還の一端が見られるような思いがした。(完)

.....

顕仏未来記

「月は西より出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し正像には西より東に向い末法には東より西に往く」

諫曉八幡抄

「天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すあに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき瑞相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき相なり、月は光あきらかならず在世は但八年なり、日は光明・月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり」